

実践報告

地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造

—2016年度「商店街あそびの広場」実践報告—

長谷川武史^{1)*}、今野聖士²⁾、村上正和³⁾、傳馬淳一郎⁴⁾、
堀川 真⁴⁾、宮内俊一⁴⁾、今野道裕⁴⁾

¹⁾名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科、²⁾名寄市立保健福祉学部教養教育部、

³⁾名寄市立大学保健福祉学部看護学科、⁴⁾名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科

キーワード：商店街あそびの広場、商店街、学生ボランティア

1. はじめに

商店街あそびの広場(以下、あそびの広場)は、名寄駅前商店街を会場に2012年度から継続的に行なっている事業である。商店街の空き店舗を活用し、様々な「あそび」を通して、子どもや親、大学生やさらに商店街の交流を図ることを目的にしている。

2016年度からは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの課題研究事業として実施しており、前年度に引き続き学生参加者はボランティアだけではなく関係教員が担当する「フィールドグループワーク(以下、FGW)¹⁾」における活動として一部位置付けて実施された(なお、これまでの経過は清水池ほか〔2014〕〔2015〕参照)。

本稿の目的は、2016年9月17日に実施した、2016年度「商店街あそびの広場」の実践報告を行うことである。今年度の実施概要を述べた上で、当日来場者および参加大学生に実施したアンケートを中心に、参加者の参加効果を中心としたあそびの広場の評価と今後の課題を考察する。

2. 2016年度「商店街あそびの広場」実施概要

1) 実施目的

「商店街あそびの広場」の目的の一つは学生と地域が繋がる場を提供することである。2016年度も40名を超える学生参加があった。保健福祉学部社会保育学科および短期大学部児童学科においては直接的な保育実習の準備的体験ができる。講義等で得た知識・技能を実践的に子どもたちに伝える場となる。また、他の保健福祉学部学科学生においても、子どもたちとの実践的な対応の経験が増えることは有益である。2015年度からはさらに社会福祉協議会および高齢者の参加も実現し、より多様な地域との関わりを生み出しつつある。多様な世代が「こどものため」を合言葉に集い、「商店街あそびの広場」に取り組み、重層的な交流を図ることで、学生と地域を結ぶこともねらいとしている。目的の二つ目は「商店街の活性化」である。多くの親子連れ(例年、幼児を含む約400名以上)の参加があり、比較的滞在時間の長い行事であり、回を重ねるごとに少しずつではあるが商店街で買い物をする等の動きも見られている。市民の認知度も高まってきおり、「継続」を希望する声も高い。

*責任著者 E-mail:t-hasegawa@nayoro.ac.jp

「児童文化」を軸に、学生と地域の子どもたちが遊びを通じ、地域の「児童文化」を創造していく取り組みは、制度の中とはまた違う地域の子どもの関わりを学べる実践的な場となる。学生にとっては地域の大人との関わりもまた重要な学びとなる。また2014年度からはFGWの実践の場としても「商店街あそびの広場」は活用されてきた。昨年度からは、「商店街あそびの広場」そのものに関わるFGWも動き出し、新たな学生の関わりを模索している段階である。

2) 実施状況

「商店街あそびの広場」は昨年度以前と同様に、商店街あそびの広場実行委員会が主催、MOA美術館北の児童作品展実行委員会およびひまわりの絵コンクール実行委員会との共催で実施された(表1参照)。名寄市商工会議所、名寄市商店街連合会等の協力および市教育委員会の後援を得て、同実行委員会を結成し実施している。今年度で5回目の開催となり、2016年度の「商店街あそびの広場」は、9月17日土曜日に実施した。あそびの広場で用意した「あそび」をテーマとした会場の他に、両作品展の展覧、スタンプラリー、商店街店舗での独自のイベントなども実施され、会場も商店街を中心に、駅前交流プラザ「よろーな」、市街中心部の大型商業店の一角で名寄市社会福祉協議会が行っている「多分野・多世代地域活動拠点ここほっと」でもイベントが行われた。表2は2016年度の実施企画一覧である(当日の様子については写真1~4を参照)。今年度のあそびの広場に来場した子ども、保護者の総数は、当日のスタンプラリーの用紙配布数などを勘案して約300名と推計した。

表1 2016年度商店街あそびの広場実施体制

開催日	2016年9月17日(土)
主催	商店街あそびの広場実行委員会 委員長：今野道裕(名寄市立大学保健福祉学部 社会保育学科) 事務局：MOA
共催	MOA美術館北の児童作品展実行委員会 委員長：高橋藤次(株式会社高橋組) ひまわりの絵コンクール実行委員会 委員長：山田典幸(名寄市議会議員)
うち大学関係	教員7名 内訳 保健福祉部社会保育学科4名、同看護学科1名、 同社会福祉学科1名、同教養教育部1名
当日学生ボランティア	32名
資料	あそびの広場実行委員会資料より作成



写真1 ひまわり手形アート



写真2 バルーン



写真3 人形劇



写真4 救命体験

表2 2016年度商店街あそびの広場実施企画

	担当団体	学生配置	備考
スタンプラリー	商店街連合会		
児童作品展	MOA		
生け花・茶の湯体験	MOA		
ひまわりの絵コンクール	ひまわりの絵		空き店舗活用
街中マーケット	社会福祉協議会		
宝探し	なにいろかふえ		
迷路	みどりの郷		
ミニSL	キマロキ保存会	○	
牧草ロールお絵描き	大学	○	
けん玉・コマ	大学	○	空き店舗活用
人形劇	大学	○	空き店舗活用
バルーン	大学	○	空き店舗活用
おもちゃ広場	大学	○	空き店舗活用
カプラ積み木	大学	○	空き店舗活用
折り染め	大学	○	空き店舗活用
ひまわり手形アート	大学	○	空き店舗活用
絵本・紙芝居	大学	○	空き店舗活用
折り紙	大学	○	空き店舗活用
射的	大学	○	空き店舗活用
ミニ絵本	大学	○	
救命体験	大学	FGW	
街中ライブ	大学		

資料：商店街あそびの広場実行委員会資料より作成

3. アンケート分析

1) 来場者

来場した保護者を主な対象としたアンケート用紙を各企画会場で配布し、会場内の複数個所に回収場所を設置した。回収数は25名と参加推計と比べると低い回収数であったが、これはあそびの広場実施期間中に参加者が自由に入退場出来ることで、参加しやすい会場作りを企図していたため、一定の方法によってアンケート用紙の配布・回収ができなかったことが要因である。今後、回収専属の学生を配置するなど、アンケート用紙の回収数を増やす取り組みが必要である。主なアンケート集計結果としては、あそびの広場への参加回数については、「初めて」と回答した者が全体の68%(17名)と最も多かったが、中には5回全て参加していると回答した方もいた。自由記述においても、『商店街には興味があったので、商店街の方とお話しする機会ができてとてもよかったです。「イオンがあるから…」の声をよく聞きますが、(中略)それでも商店街はおもしろかったです。(30代女性)』、『隣

町から初めて参加しました。空店舗が多い事に驚きましたが、子供とゆったり遊びながら商店街を歩き楽しかったです。また機会があれば参加したいです。(40代女性)』など、本事業の目的の1つである「商店街の活性化」に繋がる体験を参加者が行うことができていることが示唆された。参加した企画数については、平均6.9(最大15、最小2)となっており、参加者は商店街内の複数の場所を回り参加していたことが明らかとなり、商店街の様子を知ってもらう機会になっていると判断できる。また、その他自由記述として、あそびの広場実施に関する課題も提示されており、次年度以降の改善につなげていくための基礎資料となった。

2)大学生

参加した大学生を中心にした参加学生へのアンケートについては、イベント終了後に用紙を配布・回収している。参加学生の総数は32名、うちアンケート回収数は24名となっている(回収率75%)。回答者の所属学科は、社会保育学科または短期大学部児童学科が41%(10名)、看護学科16%(4名)、栄養学科16%(4名)、無回答4名、その他2名となっている。その他と回答した2名は共に名寄高校の生徒であり、同高校ボランティア局が行っている名寄市社会福祉協議会との活動の一環として今回参加していた。

ボランティア活動への参加頻度については、「半年に1~2回」「年に1~2回」がそれぞれ25%(6名)と最も多く、「ほとんどない」「初めて」がそれぞれ12.5%(3名)、「月に1~2回」が8%(2名)となっていた。あそびの広場への要望(複数回答)については、「特に要望はない」が29%(7名)と最も多かったが、「休憩時間をちゃんと取りたい」「自分でもあそびの広場に参加する時間がほしい」がそれぞれ25%(6名)挙げられていた。これは昨年度以前からの課題として挙げられていた人手不足が原因となっている。この事業の目的の1つとしている学生と地域が繋がる場作りについて、本来であれば参加学生が自由時間を活用して商店街や各イベント会場を体験することで発展していくことを考えていたかが、今年度も十分な時間を参加学生に用意することができなかった。次年度以降についても、参加学生数の拡大と当日の活動時間の改善を課題として検討していく。またあそびの広場への要望の自由記述として、『寒いので室内だけでも暖房をつけて下さい。(児童2年)』『かたづけをもう少し早く終わらせたい。(寒い)(看護3年)』など、当日の天候に関する事柄も挙げられていた。前年度までと比べて今年度の開催が遅れたことが要因であったが、次年度以降についても開催時期の環境を踏まえた実施体制を検討していく必要がある。

参加学生のボランティア効果測定として、清水池ほか(前掲)で使用した活動成果測定尺度18項目およびボランティア活動動機測定尺度20項目の計38項目の尺度を元に、引き続き設定した。回答結果には「強くそう思う」4点、「ややそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点の得点を付け、各項目の平均点を求めた。表3は参加学生の活動成果評価尺度についてである。「活動そのものが楽しめた」(3.5)、「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた」(3.4)、「あそびの広場に参加してよかった」(3.6)など、活動そのものに対する評価は高かった。一方で、「仲の良い友達ができる」(2.4)、「必要とされていることが実感でき自信につながった」(2.9)、「対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた」(2.8)の項目では低い評価となっている。これらは前述した参加学生の少なさから活動内容が固定化し自由時間が確保できなかったことによる参加方法の硬直性が要因になっていると考えられる。これらの評価を高めていくためにも、参加学生にはあそびの広場全体を体験できる柔軟な参加体制を整えることで、学生と参加する子どもや保護者、商店街との交流機会の増加を図っていくことが重要である。

表4は参加学生の活動動機評価尺度であ

表3 参加学生の活動成果評価尺度の平均点

項目	平均
仲の良い友達ができる	2.4
活動そのものが楽しめた	3.5
人に対して思いやることを意識できた	3.2
活動通じて自分自身が成長できた	3.0
活動を通じて喜びや感動を経験した	3.3
対象者や他のボランティアから様々なことを教えられて勉強になった	3.2
必要とされていることが実感でき自信につながった	2.9
やりがい生まれた	3.1
対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	3.4
気持ちの充足感が生まれた	3.3
「もっと~したい」など自分自身を高める目標が生まれた	3.0
新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	3.1
自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた	3.2
対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた	2.8
人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	3.1
日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった	3.1
あそびの広場に参加してよかった	3.6
来年もあそびの広場に参加したい	3.1

資料:参加学生向けアンケート結果より作成

註:「強くそう思う」4点、「ややそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「まったくそう思わない」1点として計算

表4 参加学生の活動動機評価尺度の平均点

項目	平均
喜んだり楽しんだりできる	3.1
人はお互いに助け合わねばならず、自分にもその義務がある	2.7
自分の持っている知識、技術を使う練習になる	2.8
余暇が有効に使える	2.8
対象者の苦しみが和らぐ	2.1
人に喜んでもらえる	3.2
自己を再発見し、成長させることができる	3.1
対象者が積極的に社会参加できる	3.0
何らかの報酬や返礼が期待できる	2.5
社会の一員として当然のことだ	2.5
毎日の生活に充実感が出る	3.3
人や社会の役に立てる	3.2
自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	3.3
対象者が喜びを感じることができる	3.2
友人を得ることができる	2.4
自分の知識、経験、技術を活かすことができる	3.0
他のボランティアと楽しく活動できる	3.0
活動を通じて積極的に社会参加できる	3.1
教員・友人などから誘われたから	3.2
商店街に興味があったから	2.5

資料：参加学生向けアンケート結果より作成

註：「強く思う」4点、「やや思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「まったく思わない」1点として計算

本事業の最終的な目的は、地域の子どもたちにとって、安心して楽しいあそびを継承し、経験として蓄積していく場になり、将来的には地域の子どもたち自身がこの取り組みの主体者の1人となって育っていくことでもある。そのことが、目的の1つである「商店街の活性化」も下支えしていくことにもつながる。今年度の成果と課題を踏まえ、地域内で継続できる「形」を追求し、大学・商店街・また行政との一層の協力・協働関係を次年度以降も図っていく。

【註】

¹ フィールドグループワークは保健福祉学部3年次生に開講されている連携教育科目である。5～10名程度のグループに分かれ演習を行い、栄養・看護・社会福祉の各分野の知識を元に、幅広い年齢の地域住民を対象に事業・行事を企画・実施することを通じて、保健医療福祉連携の仕組みや機能的な連携方法を学ぶことを目的としている。

【参考文献】

清水池 義治・長谷川 武史・傳馬 淳一郎・三井 登・宮内 俊一・今野 道裕 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造：2013年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第32号、69-81頁、2014年3月
 清水池 義治・村上 正和・長谷川 武史・傳馬 淳一郎・三井 登・宮内 俊一・今野 道裕 「来場者の評価に対応した実施企画の充実・拡大と今後の課題：2014年度「商店街あそびの広場」実践報告」『地域と住民』第33号、105-112頁、2015年3月

【付記】

本稿は、平成28年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター研究・実践支援による「『商店街あそびの広場』～『児童文化』で学生と子ども・地域をつなぐ～」における成果の一部である。

る。講義(FGW)で参加した者も回答に入っていると想定されるため、回答者の参加動機が多様であったこと、前述の通り参加方法の硬直性による学生同士の自由な交流機会が十分用意できていないことが全体的な平均点の低さの要因として考えられる。前年度以前と同様の傾向として、「友人を得ることができる」(2.4)が低いことが挙げられる。

4. おわりに

本稿では、2016年度「商店街あそびの広場」の実践における来場者や参加大学生に対する活動効果を中心としたあそびの広場の評価と今後の課題について取り上げた。来場者に対しては一定の参加効果が見られたものの、アンケートの回収数が低く、次年度以降回収数を増加する方策が求められる。学生に対しては、参加方法の硬直化を解消するため、参加学生数の増加と参加方法を再度検討する必要性が明らかとなった。

